地域資源をもとにした「ふるさと理解」の研究
－２３０年の伝統行事ミャークヅツを中心に－

川上　哲也(池間文化協会会長、愛媛大学大学院連合農学研究科特定研究員)

はじめに

ふるさとは沖縄県宮古島市池間島である。池間系(池間、佐良浜、西原)では、昔からサウガツ(正月)、ヒャーリクズ(海神祭)、ミャークヅツ(宮古節)を三大行事として待ちわびる。なかでもミャークヅツ(市指定無形民俗文化財 1981 年)となれば､年一度の神聖な場であるナナムイ(ウハルズ御嶽・大主神社)参拝を兼ることもあって島外から集まり人口も膨れるほど活気に満ちる。

年輩は､「カギ ミャークヅツ　マイ　スマーナラヒー　ヒカッジャ　ユミー　ンミャイーフースゥガ」(香ばしい宮古節が地響きをたてて日々の時を重ね足音も高くやってきた)と指折り数え一日千秋の思いで迎える。スマの賢者で島の生き字引と称された前泊徳正[1](1910～1998)はミャークヅツを｢池間民族の最高の喜びを表現する行事｣この上もなく楽しい世の中、現世、浮世とその意義を強調した。

この行事は、「旧暦 8、9 月の甲午(キノエウマ)の日から 3 日間開催する池間島最大行事で粟の収穫祭と豊年祈願祭である。ムトゥヌ・ウヤ(ムトゥの親･儀礼集団)と称される数え 55 歳以上の男性を中心に 4 ムトゥ(真謝、上げ枡、前之屋、前里)で年齢階層的に運営される。円滑に進めるためにサントウイ・ウヤ(会計)補佐を含めニガイ・ウヤ(神願担当)書記、監査役の係りをおいて 3 日間、未明から各ムトゥに集まってミルク酒を酌み交わし談笑して過ごす。

ミルク酒は 1958(昭和 33)年のミャークヅツに始まり 64 年になる。考案したのは、島出身の翁長春福(1893～1967)だ。翁長は琉球政府警備艇の船長だった。キリスト教の賛美歌を歌い磨き砂やカマボコ製造を発明した。晩年は庭先のガジュマルの木陰で子牛を飼って島人から慕われていた。大世帯の前里ムトゥでは、恒例で人気の高いコンデンスミルクを材料にしたミルク湯を 3 合瓶(600 ㎖)につめ振る舞う。前里ムトゥが 2014(平成 26)年のミャークヅツで、ミルク缶(385g)240 個を使用した。

夕方、4 時頃から池間・前里両字の境界にある水浜で会場は上枡ムトゥがワーティ(上座)向かいに前之屋ムトゥそして真謝ムトゥがスムティ(下座)に陣取る。ツカサンマ(司母)たちのクイチャー(伝統舞踊)に合流し盛大に踊って過ごす。2 日目の未明にはヤラビマスムイ(神様への出生登録)があり､前年のミャークヅツ以降に生まれた乳児の名前を披露する。かつて健康を祝して小魚をくばる儀礼や若水汲みの風習もあった。

ミャークヅツ最大の呼びものはクイチャーである。男性が動物的な踊りに対し女性は植物的で優雅に舞って対照的だ。ムトゥでの言い伝えでは、ズナラドゥ　ズナラ(地鳴り)と大地を踏

衣装が時代を語る　　(撮影：譜久村健)

むことを勧める。水浜広場の会場では 3 種類のクイチャーが登場する。最初は神様の名をあげ褒めたたえるカンナーギ・クイチャーで、島の役人だった仲保屋の主をたたえる。

次に歌われるのが一般的なクイチャーで、「収穫の喜びと神に感謝するため踊られ若い男女の中での娯楽となった」昔は、独身の男女すべてが毎晩のように踊っていた。大正 14 年を境に原形は失われたようだ。昭和 30 年代、筆者が少年時代には、水浜からマイバイ・ジャー(前南座)に移動し夜遅くまで歌い踊っていた。

最後に踊られるのが唯一の回転クイチャー『アニガマヤー』である。昔は女性だけで踊ったらしい。姉さんという意味だが、池間独特で速いテンポにのり小走りに踊る。円を左に駈け出したかと思うと反転し右に駈け出す。女性たちが長年、歴史の中でいかにすれば愉快に、より勇ましく元気に踊れるか苦心惨憺して作ったと言われる。体力を消耗するが踊るウヤ仲間の笑顔に疲れも吹っ飛ぶ。

ミャークヅツの日には、豊穣を持って出るから島外に出てはならない。但し、島外から船や人は豊かな富を島に持ってくるといって歓迎する。島中が祭り一色となる 3 日間、歌い踊ってムトゥ神を奉り交流する。「高齢男尊社会」で最高齢者の絶対権限と健康の「マス」はムトゥの傘下家族子弟への富の平等分配と繁栄を祈願する。ウヤ達には慈悲深い「ウイビトゥマス」を与え、誕生する子には「長寿」への祈りと倫理の心を持つ「ヤラビマス」を与える。こうした催しを伝統ある行事と位置づけ人間と自然が一体となって郷土文化として祭りを形成して 230 年余も営々と継承されてきただろう。

池間島の概況

宮古島の北端、西平安名崎の北方 1.3 キロメートルにある島で面積が 2.77 平方キロメートル、周囲 9.03 キロメートル、最高標高 28.0 メートルで平たい小島である。島の大部分は琉球石灰岩からなり島尻マージで覆われている。島の中央に入江、低湿地があり野鳥の飛来地として知られている。集落は、池間、前里の 2 字からなり島の南端フダン、タカンミ、マイバイ、タヌイ、フギースタ、スキンマとつらなり立地している。

1940(昭和 15)年の統計によると、戸数 280 戸、人口 1,800 名だった。1961 年には、世帯数 435、人口が 2,454 名で漁船従事者が 341 名である。カツオ漁業で他村の狩俣、大神島から出稼ぎ者 107 名の 23.9%にものぼる。そして、児童生徒は小学校生が 465 名、中学生が 214 名、合計 679 名で希望の膨らむ誇り高い自慢の池間島だった。

あれから 60 年が経ち、人口は 512 名(男 285 名、女 337 名)69 歳以上が 206 名(2021 年 9 月末日)で老人の島になりつつある。2021 年、併置校で児童生徒が小学生 13 名、中学生 12 名で時代の変化と共に急激な人口減少の一途をたどっている。

港の南側正面に高さ 20m、長さ 200m のバリナウダキ(島で壮大な自然壁)がきりたっている。その一帯はウイバラ(上原)と言う聖地になっている。こんもりと生い茂った樹木の奥には島の守護神であるナナムイ(ウハルズ御嶽)が祀られ

半世紀前の下地恵義校長、佐渡山正吉教頭と中学生　(撮影：山里勝助)

ている。宮古中のンヌツニー(生命根の神)として知られ航海安全や豊漁豊作の神様としても崇められている。この聖なる場所は、年に一度の島最大の行事ミャークヅツ(宮古節)以外、御嶽を守り神事を司るツカサンマ(女性祭祀)の最高職であるフヅカサンマ(大司)の許可なくして足を踏み入れることの出来ない聖地である。

昭和 30 年代までツカサンマは年中行事のユークイ(豊穣を乞う願い)ンマ(51 歳～55 歳の女性)約 100 名を先導し島一周の巡礼をした。順路はウハルズを出発しナッブア、トゥヌガナス、ムイクス、カータガー等で祈願した。

かつて池間島には湧き水がないので昔から水に不自由した。カー(井戸)を中心に桶を並べてアサガーイツ(夜明け)(2)から水汲み頭上にのせて運んだ。その井戸はマイ、カータ、タヌイ、ムッドゥマイ、ッスゥキ、ンタ、トゥビガーの 8 ヵ所で現存している。1972 年の海底送水によって不自由から解放された。

そのほか、第 4 種漁港施設をもち、昭和 30 年代まで近海カツオ漁業を主体にサトウキビ栽培を付加して島の経済は支えられていた。池間漁港(第 4 種 1961 年指定)は自然に恵まれ県内で有数の避難港である。沖縄県では、広域漁港整備事業として総工費 7 億 7 千万円を投じ 2001 年から 5 年間にわたり整備した。

市は、その完了に伴い港の一角に記念として「池間漁港碑」(2006 年)を建立した。現代風で銘板にはカラー写真で彩っている。カツオ漁業が盛んな船団やカツオ節工場のモノクロ写真も当時をしのばせている。中でも、カツオの歴史を説明しているのが目を引く。

この碑から道路を隔て、カツオの島だったことを象徴するかのように「かつおモニュメント」がひときわ目立っている。旧平良市が 1992 年度から 13 億 5 千万円をかけて「池間島集落排水事業」をすすめた。その一環で 1996 年 5 月に完成した。傍には、上里登(1930～2014)さんご店経営)がサンゴ商業 20 周年を記念して「漁場発祥の地」の記念碑(1995 年)を建立した。それから、池間島の「心の歌」として 80 年も歌い継がれた「池間行進曲」の歌碑(1996 年)も燦然と輝いている。誰が名付けたか、いつしか島人から「かつお公園」として親しまれている。

歌碑建立に集う池間家の親族　(撮影：不詳)

池間島は自然の漁場に恵まれ、島の北東 16 キロには広大な 100 以上を数えるサンゴ礁群ヤビジ(八重干瀬)を有している。それにフデ岩をはじめイラビジ、タチャタイ、フッビジ等の干瀬も連なっている。海の幸を求めた賑わいは、陰をひそめたが旧 3 月 3 日(サニツ)島の行事として老若男女それぞれの干瀬に浜下りを楽しむ。昭和 10 年頃からカツオ船等でヤビジへ潮干狩りするようになった。夕方には、取り立てのタコや貝、魚を肴に家庭や親戚が集い団らんの場となり交流を深めた。

島の中央部にある湿原は、1964(昭和 39)年の池間漁港浚渫整備事業によってイーヌブー(入江)の入り口がせき止められて出来た干拓地である。県内でも有数の湿原地として名高く渡り鳥のサギやカモ類の越冬地として知られている。最近、陸地化が急速にすすみ大きな問題になっている。

1992(平成 4)年 2 月 14 日、島民が待望した池間大橋が開通した。大橋の欄干バルコニーには、池間中学校生徒による「島の子の夢たくす橋開

通へ」「湿原に羽音を残す渡り鳥」「渡る日はもうすぐそこに海の橋」「漁に出た父を迎えに13 夜」の句が刻まれている。開通に伴って一周道路の整備をはじめ集落の舗装、家並みも様変わり人間関係や社会形態まで変貌し人口(開通当時 921 名)の増加を期待したが減少の一途で憂慮すべき面も多々ある。忘れがたい島の誇る自慢に親子ラジオがある。1955 年の設立から文化、社会、経済、教育の移り変わりを 67 年も見てきた。親子 2 代で一つの事業に打ちこんだ実績は小さな島に燦然と輝き隠れた勲章ものといえよう。

1　ミャークヅツの歴史的な経緯

(1) 人頭税(1637〜1903)にかかる島人の暮らし

池間の漁民にウヤイン(公海)を命じて収奪した。公海とは臨時税に相応するもので、どんな時化の時でも出漁して魚を捕って蔵元の役人達のために献上することである。体長 5 寸以上の魚 5 尾ずつ割り当てたと具体的な数字まで示している。前泊徳正翁は池間の男の人たちは 3 種類の重税ウヤイン(公漁)、ツツージャウナウ(ナマコの乾燥物上納)、それにサバヌハニジュナウ(鱶ヒレ上納)と口癖にしていた。

その時代は、「島民ハ皆薩摩芋ヲ常食トシ富裕者トモ僅に祝事祭典時粟ヲ食スルノミ大方ノ農民ハ粟ノ味ヲ知ラズ。衣服ハ芭蕉布一枚、冬ハ破レタル木綿一枚」で、年中、夏衣を家族数人で代る代る着けていた。

百姓は芭蕉布だけで木綿も許されなかった。柄にも制限があり、履き物も許されず裸足である。傘も許されずクバガサとミノだけであった。大神島は毛作が全く出来ないので特別に免租の制度があり区別のために俗称ウガンフーグル(赤土色)の着物を着けさせられたという。

住居は瓦家が許されず屋敷と家の大きさも制限があった。用材も樫の木や石垣も禁じられ木の垣であった。石垣の上にガジュマルや竹を植えたのが現在も残っている。役人が来島するときは、土下座して迎えたと言われている。

役人は、村番所の貢布座で織女の中から適当な者を物色していた。美貌の織女たちは御用(呼び出しに)に係り次々に子供を作っていく。役人は任期を終えて平良の町にかえると、後は知らぬで通してしまう。村人はこの子をアカサ(父なし子)といって宿命の十字架を背負わされてしまうのである。人頭税を恐れた農民は縁者を頼って役人の家に奴隷奉公を願い出る者も多かった。これを名子と称した。名子奉公はいくらか御情をかけて貰うことが出来た。

「池間在勤の役人は、島の美貌の女子を、その館に連れてきて雑用に使ったり女にした。権力の前には屈せざるをえなかったであろう。美女かならずしも幸福でなかったわけだ。腹の子でありながら、その子孫は士族が許されるのもいた。そういう役人の子孫が池間島にはかなり現存している」(森田:仲間屋真小伝 1961 頁 35)。

池間島の前里 49 番地に姉妹揃って美人がいてその好評たるや実に八重山までも聞こえわたった。沖縄本島から往き来する船も、池間の近くを通ると必ずその姉妹をみないと出発しなかった。平良から出張してくる役人は尚更だった。姉は八重山へ妹が平良の役人と結婚した。

妹に思いを寄せていた役人達は、夫の留守を見計らって彼女の側へ行き、「池間にいた頃のミガガマは花のように美しかったが嫁いでから醜い姿に変わり果ててしまった。」ミガガマはすかさず「灰を被った猫の子や犬の子みたいになっても夫がさえ可愛がってもらえばそれで満足です」とかえす歌がよく知られる「池間の主」である(前泊：池間島の民謡 1982 頁 145)。

貢納が滞納になると、村番所に呼び出され拷問する道具「かし木」に入れられた。両足を丸太で挟み締め付けるようにしたもので滞納者を

警めたものである。一旦この拷問を受けると大抵片輪になる。ピキニン(疋人)[3]と言われて一生を日陰者で暮らさねばならないのである。こうして貧と税の板挟みに苦しんだ挙げ句、我が子を深淵に投ずる者があり嬰児殺しをするようにもなった。

貢租の滞納を防止するために徴収の方法として 5 人組制度を設けた。彼らは木札に名前を記して、毎朝、畑に出るときブンミヤー(番所)で、耕作筆者の面引き合わせを受けることになっていた。この際、遅参した者は即座に尻鞭を五つ叩きつけた。

平民の女子に課せられた貢反布は、御物奉行の宰領品で薩摩への献上品であるから品質検査が厳重をきわめたものである。もしも品質粗悪な貢反布を発見したときは、織女はもちろん役人も責任をとって罷免された。製作にあたるものは悲痛な思いで機織りにあたった。検査が始まってから終わるまで織女たちはひざまづいて神を念じつつアヤグを歌ったものである。

「伊良部の佐和田村でダニンマによる蔵元の貢布座における役人とのやりとり歌『石嶺のあかう木』で伝わっている。彼女の美貌と才智に懸想していた検査座の与人は、小さくなって座っているダニンマに対して妾になってくれと要求した。一蹴したら村全体の貢布の検査にかかわる。だからといって貞操をうることは彼女の魂が許さなかった。ダニンマは悲痛な面持ちで首をうなだれていた。

即興詩で歌の一首である「石嶺ぬ赤宇木ぬ／根うりうりそやの／石や抱きど土や抱きど／根うりうり／ばんぶなりゃ男抱きど／根うりうり／と(石を抱き深く根を下ろしているように、わたしも愛しい愛人があって根をおろしています)即妙の歌を以て答えている。伊良部女性の堅固な貞操観念と歌のもつ優美な旋律は、たしかにアヤグの白眉であろう」(伊良部村史 1978 頁 352)。

宮古の近世は、百姓が過酷な人頭税に苦しめられるが、悲哀や役人に対する抵抗の姿勢をうたった歌謡も今日に伝わっている。多くの人々に親しまれている「豆の花」が代表作である。

1　すともてぬ豆が花／明きしやるぬ露が花　2　豆が花ぴとぱな／露が花かたぱな　3　はいよはい前里親仁座／汝が子ゆ我が呉る／　4　我が子ぬ真かまどや／目差親とたけあらん　5　たきなしばたきどなす／ぷどなしばぷがどなす／　6　年齢数みば 17 つ／肌見りば今童び　7　我が言葉聞かだから／親の言葉聞かだから　8　20 舛むど織らさで／細物うど抱かさで　9　20 舛まい織りゆるさん／細物まい抱きゆるさん／

豆は「小豆」である。

その意は、「ある日、村役人の目差親が美しい娘をもつ百姓の父親に対して、お前の娘を自分の妾によこせと迫る。娘の父親は、自分の娘は目差親とは身分が違う、とその要求を断る。役人は、身分の違いなんてどうにでもなる、夫婦になれば同じことだ。となおも迫る。父親が自分の娘はまだ年齢もいかない小娘であるから、それは出来ないと断ると、役人はたちまち激怒して、それならお前の家族の者には、20 舛の細かい上布を織らせるぞと脅しにかかる。それでも父親は、それは結構なこと、20 舛の布でも、そんな細布でも、織ってみせようと、役人の不当な要求をはね返す」(みやこの歴史　宮古島市史第一巻通史編 2012 頁 180)。時の権力者やその同調者を揶揄し抵抗する内容の歌が意外に多い。池間では織物を細かく織る人をパタイムウリヤといった。

(2) 背景に重圧と出作耕作

人頭税は 1637 年から 1903 年の 266 年間にわたり農民に税を課した。農民は他村への移動を

禁じられ、生まれてから死ぬまで納税する奴隷となった。こうしたことからこの制度にまつわる状況は、各地に数々の形で言い伝えられ今日に至っている。

物納として男子は粟、女子にあっては上布だった。その中にあって、貢納上布にあたった婦女子は、掘っ建て小屋で日光も届かず「織座」が 4 間に 3 間ほどの作業場で仕事をした。そのうえ、授乳時も役人に監視され続けたというからたまらない。それだけに、人頭税にかかる伝説、歌、悲惨な物語は、数限りなくある。その一つに、棒踊り／石取り／威さまいばよ／あていぬ／悲らしやんなどうっぬ／悲らしゃなよ／(棒を取り石をとって脅される。あまりの悲しさに、このうえない悲しさ)さらに、子守唄で、汝が父や／んざんかいが／汝が母や／ずまんかいが／天太たふま上たふまていど／うな取りが／ぴりたり／(お前の父母は何処へいった。上役人たちを殺害しようと毒魚を獲りに行った)(伊良部村史 1978 頁 111)。

苦しさから逃れるために無人島への逃散、時に、自分で障害の体になったり山賊海賊となり島民を脅かす者も現れた。さらに村一番の美女は役人の強要で賄女や現地妻にもなった事も伝えられている。「役人が平良から上納布織りの状況を見るため来島(4)した。役人達は織子達の上納布を洗濯している状況を見廻る。洗濯係の監視も厳しかった。織子達は一週間も徹夜して洗濯させられた。足は腫れてふくらみが固くなり足の神経が鈍るまでも酷使されたというのである。

布ツフ(布織り係り)が織り子達の仕事ぶりを見てずるけていると、思われたら全員結えてある頭髪に棒を通してから男の人に担がせて苦しい目にあわせていたという。池間に出張する役人が遠見台へ見物に登るときは雨戸を 2 枚重ねてその上にのせて、数人係で肩にかついで 1 日 2、3 回上下往復した」と貢納布について涙ぐましい記録(前泊徳正ノート 1975)がつづられている。

「1731 年に池間から長間うぷし原に移住させられたときの歌がある。それは悲劇の女自身が胸中を歌ったものである。池間与人は、その愛する女の夫婦仲を割いて、彼女を長間移民として送り出し間もなく自分も長間与人として彼女の後を追った。しかし、女の愛を得ることが出来ず、そのうちに彼女は『長間にひとつある井戸は、私の怨みで潮水が湧くだろう。その時こそは、愛する夫の許に帰ろう』と誓った甲斐もなくマラリアのために長間で死んだという哀話を残している」(稲村：宮古島庶民史 1972 頁 338)。

「18 世紀初頭から池間島の人々が人頭税の微増から解放されようとして出作耕作を始めた。その地域が、伊良部島の北端に位置する佐良浜である。朝、伊良部島に行って耕作をやり夕方収穫物を積んで帰るという出作耕作であった。時化になると、たいそう困った。それでも凪になると、耕作するという状態が百年間も続いた。人々は、次第に家を建て次男、三男や女の子を呼び寄せ 1720 年には本村よりも大きな村になった」(大井：池間嶋史誌 1984 頁 93)。

「元来、池間島は土地が狭かったが人頭税時代の上納物はあくまで五穀と貢納付の納入である。人頭税の徴収が始まって以来、隣の島々に出稼ぎ耕作をせねばならなかった。こうして伊良部島への出稼ぎ耕作が始まった。初めは隣村の狩俣村への耕作もあった。僅かの魚類を運んで行って粟や麦と交換したらしい。当時、池間島には農地の相続に特殊の方法がとられていた。各家々の畑がヤーダマ地(分譲地)とムトゥヤーダマ地(本家の土地)があった。耕地は家がどんなに零落しても他に譲らなかっただけに出稼ぎも苦肉の策といえる」(伊良部村史 1978 頁

205)。

(3) **悲劇から改革の風**

人頭税は世界税制史上最悪といわれ島人の生活を苦しめた。貧しい人々は裕福な人々の夕食後の残り物を乞食同様に「物乞い」をした。中には、畑仕事の加勢し代償にサツマイモの葉を貰ってきて茹でておにぎりし小蟹と食べていた。島の人々の生活は楽なものではなかった。次のような悲話が池間島にある。

「ある凶作の年の冬も過ぎ去ろうとしたある日、その家の主人は日が暮れてまもなく時間をおくと 1 本の銛(もり)を持って戸外へと出て行った。主人はアダンニー(阿檀根)の畑へと急いだのである。時折、穏やかでない眼差しを辺りに据えながら黙々と歩幅も広くした。穀物税を納める作物や食べる物もろくに無かった。こうした状況にあって、主人の畑が、何者かによって畑の作物が盗まれているのに腹をたてていたのだ。

もう今日で幾日も通い詰めていたのだ。主人は、畑に着くと、今日こそはと畑の隅で漁労用の銛を構えて待っていた。ひとときが過ぎて物音がした。近寄っていくと人影は懸命になって作物を刈り取っている。主人は身構えて『こんちくしょう』と銛を盗人めがけて放った。銛は盗人の背中に突き刺さった。その時、アガイィー(あああ、痛い)主人は聞いてはならない声を聞いてしまった。

父親が『カナシャガ(愛娘が)』と狼狽しながら駆けつけた。嫁いだ娘は痛みに耐えながら息途絶えたというのだ。

生きるための納税をせんがために死に目にあわせなければならなかった。そんなに辛く悲しい世相に先祖の人々は生きなければならなかった。カンツバイ(神道原)やッスゥキバイ(白木畑)等にも類似した事件があったと聞かされる。こうした悲哀の話は、母が両親や祖母から聞かされたと語ってくれた」(前泊廣美：ミャークヅツ 1996 頁 6)。

筆者が西辺中学校在職中(1999～2003)に当時 84 歳の池間シゲ(1918～2013)から聞いた。

「終戦後、どの家庭も食べ物に困り途方に暮れる日々だった。年老いた一人の畑主が、作物が盗まれるので退治しようと、ある初秋の夕暮れにカマを研ぎすませて出掛けた。畑の木陰に隠れてじっと待っていた。すると、赤児を抱いた若い母親がやってきた。その母は、土を掘り起こし、その穴に児を入れ安全確認してから手を合わせた。

『私はこれからアカウディーン(取り残された芋)を掘り起こし盗みをするが許してください。大地の神様、この畑にはこれからもっと豊かに実らせ当家の幸せとご繁栄を・・・・』と口にした。それを聞いた畑主は大粒の涙を流し、ただ見守っていた」という。貧困という中での出来事とはいえ現代版にして道徳教育につながる素材にしたいものだ。

人頭税廃止の中村十作について当時 80 歳の前泊徳正翁(1910～1998)から次のような話を聞いた。

「池間島のヌブイダツ(喉崎・港の干潟)に一隻の帆舟が碇泊していた。そこに島のユマッター(四辻・奥浜翁)が、舟主と友達になった。奥浜は、共通語が解らないので会話の手段は、手真似でやるしかなかった。舟主は、容姿・風貌から島人とかけはなれ身分も高そうで名も知らない渡来人・中村十作(1867～1943)であった。渡航の目的が真珠養殖場を探していたのだ。

数日、通ったら中村は奥浜に朝食べた物を持ってくるように求めてきた。早速、味噌もない海水で味付けた汁と親指ほどのサツマイモを提示した。すると「おいしい」と食べ、「毎日このような物を食べるのか？島人の生業は？島

人の日課？・・・」と立て続けに質問するので素直に答えた。奥浜は、わかったと言って島の代表らと話し合う機会を申し出た。

島の生き字引き物知り前泊徳正翁(撮影:筆者)

奥浜は、島のフガナマラ(指導者)を集めて話し合った。奥浜は、毎日通い中村から世間話を耳にした。いつしか、島中にジャウナウ制度(人頭税・納税義務)が無くなることを吹聴したから一気に話題となった。現状の改革は到底無理と認識していたので笑いものにされた。揚げ句に、ユマッターヌバクラウ(四辻の大嘘つき)[5]という渾名まで貰う羽目になった。しかし、事実は小説よりも奇なりで偉大な開拓者のひとりである。そういえば、島人は中村十作を中村旦那の愛称で語るのはどういう事だろうか。

前泊徳正の記録ノートによると、池間村の総代・仲間金三(仲間貞夫の父)と前里村総代・玉寄長田(東光の祖父)は下地間切嘉手苅村入江の川満亀吉(1867～1928)宅を訪れた。「大和人で中村という人が池間に来て何もかも知っておられる。そのお方にお会いしたらどうか」と相談を持ちかけた。川満は池間島に渡り中村にお会いした。後は、活発な人頭税廃止運動に取り込み宮古に一大転換期をもたらしたのである。

その頃、池間の女性達は中村の努力に大きな期待を寄せ次のタウガニアーグ(地元の歌謡)を作って唄っていたのである。

沖縄から中村旦那がヨ　貢用布　ニャンテイ
(中村十作が人頭税を廃止しようとしている)
ウリイ　ンミャバ　遊(アスウ)ヌ世ヤヨ
(実現できたら自由気ままな世になる)
踊(ブドゥイ)ヌ世ヤヨ　ディカヒィ　ウラッダラヨー
(踊り暮らして豊かになるだろう)

このようなことからすると、池間の女性達が貢用布で苦しめられていた事をうかがい知ることが出来る。

島には伝説的な人物が多かっただろうことが推察できる。奥浜の玄孫にあたる奥浜巌(1943～)は初耳だと言うから驚いた。巌に真相を確かめたが、「バンテイガ　オジイアタッル　ウムクトウアイ　ビトゥ・・・」(我らの祖父は知恵・知識の持ち主だったらしい・・・)とさらりと答えるだけだった。

2　ミャークヅツのニダティ(根立・創設)始まり

(1) ミャークヅツの起源

ミャークヅツの起源は文献記録が残っていない。島民は人頭の割重みの租税と年々重なる不作に苦しみ、やむなく身売りする住民も続出した。池間島では租税の割重みや貢物の強要がひどく、妹弟や子供を他村の豪農や知人友人のところで働かせ、その代償として穀物の借財を願い出たのである。来る年も来る年も不作は 7 年も続いた。

時代は流れ池間島の支配者イキマユンチ(池

その昔ミャークヅツのズンミジャー(協議会場)　(撮影：筆者)

間与人)仲宗根玄孝が 1778 年 47 歳で赴任した。仲保屋の主に変わると豊作が 8 ヵ年の長きに至ったので、島民の生活は楽になり借財も払い他村に働かせていたわたり妹弟や子供達も帰ってきた。不作の暗い思いから明るい希望へと変わる恵みに住民は挙って微笑みの毎日を送るようになった。島全体が喜びの色に溢れるのもすべては仲保屋の主の徳の致す所だと言う新しい支配者に対する尊敬と信頼の念が強くなり、それを記念として村人挙げての一大行事をやろうじゃないかとの声が巷に伝えられていった。

村の指導者達も住民の声をおさえる事が出来ず、役員会やズンミ(字総会)[6]等も何度も開き、住民の意志統一でその旨を仲保屋の主に伝えた。すると、初めは躊躇していたようだが、住民の熱意に推されて引き受けた。時の宮古の総支配者である頭職にその旨を具申し頭職も住民の総意であるならばよかろうと許可した。そのことを住民に告げると喜びの余り有頂天になり指導者達も会合を持った。話し合いによって行事の時期や行事の名称及びその他の事等も決めた(前泊：池間島のミャークヅツ 1981 頁 2)。

はじまって以来、数 10 年後になると、賑やかだったミャークヅツも中だるみ状態になり一抹の不振を醸し出したようである。その頃、池間島は伊良部島への出作耕作が盛んだった。こうした社会状況の中で 1836 年の干魃と暴風で死者 100 人、1844 年も大暴風に遭い死者 9 人もでた。そして 1852 年のニヌティヤーッスゥ(子年飢饉)に 6 月から 10 月まで 7 回も台風に襲われ 3000 人の死者が出て 1854 年も台風と疫病で死者 660 人と悲劇の連続だった。このような自然災害つづきでミャークヅツが廃れていたのではないだろうか。

「ある年に、ひとりの婦人が自分の可愛い息子を亡くし、余りの悲しさに埋葬してある墓地に毎日泣き続けて通っていたようである。ところが、日が経つに従ってあの綺麗な美しい姿もいつの間にか醜い姿に変わり、恐ろしく変わり果てた。その一婦人が住民に呼びかけ人間はどんなに美しい綺麗な人でも死んでしまえばあのような恐ろしい醜い姿に変わり果てる。それなら生きているうちに楽しく愉快に一生を過ごした方が人間最大の幸福であると訴えつづけた」(前泊：池間島のミャークヅツ 1981)。

住民全体の協力を得て、その後ふたたび盛り上がり盛大に行われて今日に至っている。このような実情からして、年寄り達はミャークヅツにはたとえ家庭的に如何なる事情があろうとも必ず水浜広場に出てクイチャーだけでも見なさいと遺言をして他界して逝く人も今もって少なくないのである。再起の始まりが何時だったか文献等でもみることできない。

(2) 足元に眠るミャークヅツ秘話

いくつもの伝承を抱えひっそりと静かに眠る由緒あるイキマ・ガー(池間井戸・泉)跡がある。ここは、池間島のお臍に当たり緑で覆われた場所である。元泊集落から西方へ池間灯台に向かった 200m 地点に Y 字交差点で 50 坪ほどだけに気づかない。在来の植物であるアダン(タコノキ科)、ハマボウ(アオイ科)、ニュータラギー(ギンゴウカン)が自生している。

筆者が中学生の頃、ミャークヅツの前日にイキマ・ガーからアフタガマ(小枝・木片)を一握り採取して家に持ち帰った。母が、それを当日、カマドに入れて諸準備に取りかかっていた。振り返ると、学校帰りに友人らと雑談しながら、誰れから指示されることもなく毎年のように拾って繰り返していた。

池間郷土史家の前泊徳正(1910～1988)は「イキマガー跡地の向こう側(北西～西)があの世(死の世界)こちら側がこの世(生の世界跡地があの世とこの世の境界である」と説明した。「昔、

イキマ・ガーのそばで牛を飼っていたが、その牛が井戸に落ちて死んだので、そのまま埋めてしまった」と口頭伝承されている。埋め立てた年代は不詳で、近世紀の文献資料には載っていない。

「その昔、イキマ・ガーの神様はミャークヅツの日には『タルガ　ミジュンマ　ヌ　ジャーン　ッチューイガ』(全体クイチャー座の水浜・集会所に誰が来ているか)『ターガ　インシーヌブドゥイ　ヒーウイガ』(誰がどんな踊りをしているか)とツミグル竹(孟竹の一節)で覗いていた。神様は、参集する一人ひとりを点検して豊穣をもたらした」(川上メガ明治 43 年生：談)という。

宮古本島の砂川集落でつみぐる竹で「神様は、石積みの家の門の隙間からどんな小さな出来事でも見逃せないほど目を光らせているから悪いことをしてはいけない」の言い伝えがある(川満タケ 1922～2019：談)。

ナナムイ(七杜)は最高の女神であるウラセリクタメナウ真主神(生命を司る)を崇める。参道の右手にトゥユン・ッブアジュルク(案内する女神)が居座っている。神聖なだけに行動は慎しまなければならない。言い伝えを心にこめてゆっくり歩を進めた。ツカサンマ(司母)が第 2 鳥居で温かく迎える。

ナナムイ(ウハルズ神)は慈愛の神であり且つ人民に愛情を垂れ給ういわば「平和の神」であったことは民間の伝承によって十分伺える。池間嶋史誌によると「伊良部島に耕作に出かけた恋人が、亥の端風のため、翌日は帰るといさんで出かけたのに、とうとう帰りそうにない、思案の挙げ句、相思の仲だった『南風ナスミガガマ』はポー崎に立って線香、花を丁重に捧げウハルズの神霊験あらたかな神にお願いした。「どうか明日までには真南風の和風にかえて下されと祈願すると、直ちに、真南風となり吾が思う里(彼)が伊良部から帰ることが出来た」とある。

大正 4 年に建立した鳥居も 1982(昭和 57)年に改築され今日に至っている。参拝は、今でも少年時代と同様に参道の左右に敷かれた重厚さを漂わせる砂利とあわせて緊張感でいっぱいだ。境内には、拝殿があり右手にユーグムイヤー(夜籠り家)がある。左手には、ミャーナカと呼ばれ伝馬船の船首を形取ったといわれる砂盛がある。そこには、多くの香炉が埋められ神聖の場を一層にじませている。池間の住民はすべてこの「ウハルズ」を守護神と信じている。香炉は日露戦争の時から兵役で無事帰った兵士達が神様に感謝し奉納したもの。固定していた香炉は人為でかわり 100 個から 120 個に増加したために小さな香炉の移動や処分、大きな香炉の配置換えなどがある。

鳥居をくぐる際、小学校時から赤いものは持たない。帽子をとり一礼してから素足で入る。それから木片や小石も持ち出してはならないことも体得していた。そのことを犯すと祟りがあることを信じて守り通しているからだ。

(3) ミャークヅツにまつわる懐かしい光景

池間島では人間最低の苦しみから最高の喜びに変わる時、次のような言葉が使われる

ッファガマ　ンミヌ　イミカイキャ
(子供らの小さいときには)
ウヌキャ　ムツティ　アンスク
(それらを育てるためにあんなに)
クーカタイ　スゥガドゥ　ウヌキャガ
(苦しかったが、それらが)
フゥイフゥ　ナイ　ハタラキィ　ディンナ
(大きくなって働いてお金を)
マウキィ　ムティーッティ　フィーリバ
(儲けて持ってきてくれるので)
ンナマァ　ファイヌユ　ヌンヌユーヤ

(今は食い放題、飲み放題が)
イディ　バガ　ミャークー　マチャイー
(私の最高の喜びが訪れ)
スタンティ　アティ　フゥカラス　カイバ
ナラン(余り嬉しくてたまらない)

ミャークヅツのミャークはこれから来ているので人間最高の喜びを表すということだ。ヅツ(月)はシツ(節)ともいわれる。

池間島に伝わる俚諺(ことわざ)[7]にも「スウジャ　ッバヌ　トウイツッチャ　クーサバナ」(長男 15 歳のころは生活くるしい)「ナスッチャ　ッブアヌ　トウイツッチャ　ミャースバナ」(末っ子が 15 歳の頃は生活も楽である)からも理解できる(前泊ノート 1975)。

一方、各家庭においてミャークヅツは、正月、ユーイ(大祝)の行事と同じようにスゥーカウ(訪家焼香)としてムトゥヤー(本家)、ナーヌス(名付け神宅)へ手作りの料理をお膳に盛って焼香する。サニツ(旧暦 3 月 3 日)はマイヌイ(ヨモギ握飯)と線香を持参し 15 夜がフキャギ(吹上餅)を椀一杯もて神棚・仏壇に供えて手を合わせる。この風習は、いつの頃から始まり何のためにするか定かでない。

ミャークヅツはカーウツのイー(飯椀大の小豆おにぎり)が定番である。筆者の母は、当日のスゥーカウおにぎりを家族 5 個、亡き実父母神 5 個、先祖実家神 3 個、イーバシ(命名神)4 個そしてカギドゥクヌ(屋敷神)、カギジャウ(門神)、ウカマガン(台所神)、サトゥヌフヤグミ(里神)、マウカン(先祖神)、マウ(守護神)へ各 1 個の 23 個も準備し供えた。

文化は、その土地、自然の環境の中にひらかれるものであり独自的な性格を保ちながら、どこかの一角でユニークに展開されていくものである。してみると、島の誰もがスゥーカウはじめ神願いを忘れることなく代々引き継がれているとすれば、それは有形文化以上に無形の文化いわゆる精神文化の豊かさを指摘できる。ともあれ、スゥーカウはハラウズ(親族)と語る絶好の場であり心の教育の原点でもある。

母の真剣な表情から歴史が伝わる　(撮影：筆者)

3　島人が一体となる島最大の行事ミャークヅツ

(1) 主役はムトゥヌウヤ(元之親)

ムトゥの親の組織は制度化され、その昔 41 歳以上の男に資格が与えられた。新入りをウイイディ・ウヤまたはハツ・ウヤ(初出親)、59 歳までをバカ・ウヤ(若親)、65 歳をナカ・ウヤ(中親)66 歳以上がウイビトゥ・ウヤ(老人親)またはガバウヤ(元気な親)最年長者をスゥジャッスゥ・ウヤ(大将・最高令者)と敬称している。

ムトゥ(元)での、会話はすべてスマウツ(島口)[8]である。30 年前に、学歴と地位の高い Y・N ハツウヤ(初親)が共通語で挨拶した。すると

初出親が経験する緊張の瞬時　(撮影：佐久本茂美)

スゥジャッスゥウヤ(長老格親)のひとりが

「フゥーヤ　ッブァガ　ムヌイユギャー　タルマイツカン　スマウツヒー　アッジ」(貴殿の大和言葉は誰も聞かないので島言葉で話せ)と戒めた実話もある。

今でもアラビ(初日)のウヤガンニガイ(元の祖神祈願)儀式後、恒例のウイイディ・ウヤによる自己紹介がある。十人十色の挨拶だが、一例として「ウヤタッサリ　バー○○家ヌ　○○ヌ(親の名前)　○○男(○男)○○(自分の名前)ティアイムヌヤイスゥガ」(ウヤ御一同様。私は○○屋の○○男○○と申します)「クトゥスヌカギ　ミャークヅツからクニムツ　スマムツカナイウヤタガ　スルイーウラマイ　マイザトゥ　ムトゥ　ン　ヌゥーライ　ヤグミ　フカラッサ」(今年のミャークヅツから国のため島のため貢献して来られましたお揃いのウヤたちと輝き誇るすばらしき前里ムトゥに参加できますことを大変喜んでいます)ウイイディ　ウヤヌ　カギ　ウダイー　ユマイ　カナーデイッシバ　ナラース　ジャウッジャヒィー　カナヒィー　フィーサマティ　ウヤタッサリ」(初出親としての任務も全うしますのでご指導よろしくお願いします。ウヤ御一同様)。

ハツウヤ(初出親)は、3 日間にわたる儀礼等はじめ清掃，台所，接待、後片付けの賄いを一切に引き受ける仕組みになっている。筆者は 2001 年に前里ムトゥに入会して 22 年になる。

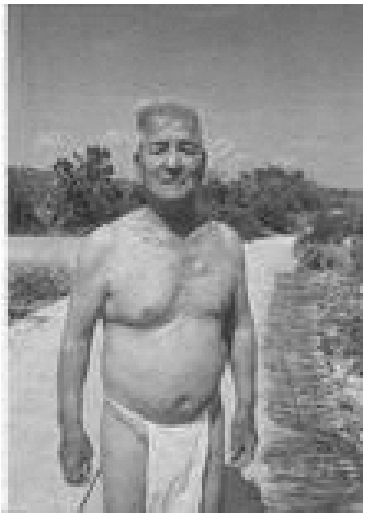
ムトゥは年齢階梯制で座る場所もトゥラヌハ(東方)上座から年齢順である。たとえ，会社の上司や公務員の課長、議会議員そして学校の校長等でも年功序列で長幼有序をかたくなに展開する社会だけに苦言や意見を述べることができない。最も年齢の高い者がムトゥの統率者となる。この統率者をスゥジャッスゥ・ウヤ(大将・最高齢者)といって意志決定の最高権威者である。

(2)ウイイディウヤ(初出親)年齢の変遷

真謝ムトゥは 4 つのムトゥの中で、先進的な活動を展開し唯一の歩みを記録している。年齢階梯を昭和 38 年以前は 41 歳 43 歳 47 歳 50 歳と改変した。入会年別及び当年の会員数は 1951(昭和 26)から記録されている。因みに、1951 年には会員数 28 名で 2011(平成 23)年には会員数 209 名で大きく膨れあがっている。1958(昭和 33)年のウイイディウヤ(初親)は 50 歳で最後だが、名簿に名前が記されてない。なお、諸帳簿は 1950(昭和 25)年から台帳(出納、会員名簿等)が備えられている(真謝ムト会員名簿 1996)。

その経緯について、マイヌヤームトゥの仲原壮一(1931～2022)から重要証言を得た。それは、マイヌヤームトゥで島の知名士・伸光丸船主で元市会議員だった仲間勇栄(1909 年生)がハツウヤ(1958 年 50 歳)の時だった。アグ(同期生)は松川利勝・上里清太郎・佐渡山金太郎の精鋭集団だった。この年齢 50 歳でムトゥ初出親はもってのほかだ。彼らは大先輩らに事の成り行きを説明し 55 歳から出来ないか申し出た。

この話には、ひとつ先輩方は一斉に反発した。「5 年間もウットゥス・ウヤとして賄いを続けるのか」周りからも「ムトゥでのニダティ(根立・創設)はおかしい」「長年の文化を壊してはならない」と喧々ごうごうで収拾つかなかった。



池間島で最後の褌姿の山城金福伯父(明治 40 年生)(撮影：筆者)

仲間勇栄の同期は沖縄水産学

校を卒業した頭脳明晰で行動、統率、団結力も秀でていた。それだけに島人からも慕われ、敬愛の眼差しで見られていた。現在でも島の誇る先達だったと語り継がれている。

背景には各カツオ船が水揚げの競争心に燃えていたからだ。池間漁業協同組合は全県下において有数の組合たる地位を失わなかった。いくたびか琉球政府から優良組合として表彰もされた。1959 年度の組合員数 479 名、出資総額は 478，100 円である。簡易ドックも完成して漁船の修理にも利便を与えている。1958 年には組合傘下のカツオ船(14 隻)の船主が合同して理想的なブロック建ての池間共同加工場を完成した。ウイイディウヤ(初出親)は村の協議で決定し 1963(昭和 38)年から現在に至っている。

初出親の年齢が 41 歳 43 歳 47 歳 50 歳と引き上げられてきた。それぞれの理由と年次は不明である。分村した佐良浜は 47 歳、西原の 50 歳でハツウヤ(初出親)の名残りだろうか。19 年前の 1995(平成 7)年に、長寿社会になったから 60 歳に引き上げてはとの意見もあったが、諸条件から見て現状がベスト(初ウヤの三日の労働力が体力的に限界に近い)だとの意見で現在になっている。

(3)「池間民族」と佐良浜・西原のミャークヅツ

池間島、伊良部・佐良浜、西原の住民や出身者達は自分たちのことを「池間民族」と呼ぶ。池間を本村、佐良浜を次男、西原を三男として称し島を越えた一種の集団的自称といえよう。特徴として 1986 年に「池間民族の集い」が本村の池間を皮切りに地域周りで現在も継続している。趣旨として「兄弟の絆を確認すると共にいっそうの親睦を図る」とうたっている。2015 年には佐良浜で 29 回目を迎え奇しくも悲願の伊良部大橋開通記念と重なり盛大に催した。

池間で 16 回目集いの際、海洋民族としての血筋を継承発展すべく明朗闊達、不撓不屈、進取の志をもって深めよと「民族シンボルの旗」まで作製した。小さいながらも「池間民族」は「バンティガ島はひとつの国」という意識の高さを物語っている。

その 3 地域は 230 年も続く伝統のミャークヅツ(起源 1786 年頃)という大規模で定例の最大行事を行っている。ハツウヤ(初出親)年齢が異なることや行事の一部にツカサンマ(司母)の女性が関与することなどいくつかの相違点をのぞくと年齢原理やマスムイ儀礼の様子はほぼ同じである。佐良浜にはムトゥが本村の池間島と同じように真謝、上げ枡、前ヌ家、前里の 4 ムトゥある。池間村ジャー(池間村の拝所座)で真謝、上げ枡、前の屋を構えている。初親の年齢が池間村で数え 47 歳、前里村が 50 歳である。ここで興味深いのが池間島にないブートゥイを加えて 4 日間執り行われていることだ。どのムトゥでも初親達は、司・願いウヤと会計ウヤ指揮の下で一切をまかなう。前日までには清掃し必要な器物(酒ガメ、ムシロ、茶碗、バカス・御神酒、皿)等や夜籠もり用の家にテント(天幕)を準備する。初親は 4 日間も雑用係りでクイチャーの円陣の中でバカス(御神酒) をもって踊り周りの参加者に酒を振る舞う。

法被の着用は池間だけである。佐良浜では特に服装に決まりがないようで普段着(T シャツ等)で参加しクイチャー舞踊も演じている。その年齢はすでに中年の域で島を離れそれぞれの人生を築いている。正月や盆に帰らなくてもミャークヅツになると戻るから魅力を秘めている。

一方、西原は 1874(明治 7)年に池間から分村した。移住にあたり一家揃ってもあったが、親兄弟等分かれて移民させられた人が多く新地に分けられることを嘆いていたそうである。西原の大浦湾東に位置するイーガマブー(西の入江)

に舟をつけ上陸してヒダガーの水を飲み小高い岡に登って池間島に向かって歌ったアーグで心境を伺うことが出来る。

はいがはい一浜ぬ鳥や小よ
(島の浜千鳥よ)
君あが羽がいゆ　借らしや下るーよーい
(貴方の羽をしばらく貸して)
池間ぬ島ゆど　離りぬ島
(離れの池間島を見て)
ゆう行き見い来いけあやーよ
(来るまで)

(創立百周年記念　西原民謡集 1975 頁 135)

こういう歴史の上にたって共通するものがある。その一つは言葉スマウツ(島口)である。2 地域の方と初対面でも島ことばを交わすと 10 年来の交流となるぐらい親密になるから不思議だ。

西原ではムトゥが分かれておらず祭祀集団がひとつである。信仰の中核となる仲間御嶽前の公道でシートやゴザを敷き野外の席ですすめる。筆者が西辺中学校に勤務(1999～2002)した時、どっぷりつかった。池間島の終身職と違って 48 歳～54 歳に各係が割り当てられている。50、51、52 歳の集団がユーグムイ(夜籠)を行う。49 歳の初親がインジャウ・ッズゥトゥイウヤ(酒の肴魚)として行列で魚にみたてて数組も担いで登場する。

指導部制度があり旗持ち、サントウイウヤ(会計)、ニガイウヤ(願親)、ヤラビマスムイ(登録)が整然と進行される。健永会もあり大きな違いも見られる。身なりは正装で派手な柄物はとがめられ白いワイシャツに黒系の着衣が相場となっている。池間と全然違った半袖白シャツにネクタイ姿そして白鉢巻き集団の勇ましいパレードもある。

集落内をパトカーに先導された集団の先頭は黒スーツの二人、神酒と酒肴を捧げ持つ。日の丸、西原自治会の旗、五穀豊穣の旗頭を掲げた面々が連なる。笛や太鼓、サンシンをのせた軽トラックの車列と沿道からの声援と拍手を受けてミャークヅツの歌を歌いながら練り歩く。やがて一団はツカサンマ達に先導され屋根付き土俵のある広場に招き入れられた。奉納相撲である。池間、佐良浜にない数々の催しで参観者も膨れあがる。古くて新しい南の島で演じられる独特の豊年祭。他のどこにもない「池間民族」の誇る伝統文化のミャークヅツである。

4　池間島のムトゥ名簿等から聞こえるもうひとつのミャークヅツ

主役となる 55 歳のウイイディウヤ(初出親)から 90 歳をこえた長老まで席を温め親や屋号でつながる人間関係も興味深い。2014(平成 26 年)の会員数をみると、真謝ムトゥが 117 人、上枡ムトゥ 89 人、前之屋ムトゥ 99 人、前里ムトゥ 360 人で構成され各ムトゥで最長老の幕開けの言葉や初出親の自己紹介それに親子、兄弟組の表彰と続きズンミ(協議)まで繰り広げられる。

60 年前の 1961(昭和 36)年には真謝ムトゥ 31 人、アギマスムトゥ 15 人、マイヌヤームトゥ 17

表1　ムトゥ親子・兄弟組の状況

	親子	兄弟6人	兄弟5人	兄弟4人	兄弟3人	兄弟2人	会員数
真謝ムトゥ	12組	0組	2組	5組	15組	33組	210人
上枡ムトゥ	5組	0組	3組	5組	11組	14組	123人
前里ムトゥ	16組	1組	3組	8組	26組	29組	367人
前之屋ムトゥ	2021年名簿なく不詳						97人

参考：真謝、上枡、前里ムトゥ名簿2021（令和3）年

人、マイザトムトゥ 57 人だったから会員数で時代の移り変わりも把握できる。一方、親子や兄弟組の表彰もスポットライトを浴び大きな拍手喝采が鳴りやまない。2021 年名簿によると表１の通りである。

表から分かるように兄弟組から社会状況が一目で分かる。中でも 1997 年に初めて兄弟 6 人組が真謝ムトゥで誕生しマスコミ報道もあり話題を呼んだ。それから 10 年後に上枡ムトゥでも表彰があり 2018 年に前里ムトゥと真謝ムトゥに現れ長寿の島として印象づけた。

(1) 足跡をつづる先駆的な真謝ムトゥ

真謝ムトゥ会員名簿2020、2021（原文のまま）を引用すると、ミャークヅツの行事の統率は、その開始以来、真謝ムトが担って来た。例えば各ムトでの行事を終え、最初にミジュンマ（水浜広場）に降りて幟旗を立てるのは真謝ムトと決まっている。その後に、他のムトが続くのである。順番を間違えることは、決して有ってはいけないとされる。またそれぞれのムト・ヌ・ウヤたちが集まり座る場所も決まっていて、真謝ムトが最も良い場所を占めている。

クイチャーを最初に踊るのも、司母からクイチャーへの参加を最初に要請される真謝ムトで、上げ舛、前の屋、前里ムトと続くことになっている。

ミャークヅツ以外でも、島の社会・経済問題やその他の改善すべき問題等があれば、その提案者のムトは真謝ムトに意見を具申し、真謝ムトの了解を得て他のムトにも伝える。真謝ムトは責任を持って、4つのムトの代表をヅンミジャー（吟味座）に集め審議する。真謝ムトの責任者（ナカウヤの中で最も有力な者）は、審議決定した事項を自治会長に申告し、協力を求めたという。

真謝ムトの肴（ウサイ）入れ容器は大正まではユーナの葉やヤラブの葉等を利用していたようだが、以後、皿を使用するようになる。なお、1977（昭和52）年からビニール製品も併用されております。

賄用品及び備品は以前、筵（ムシロ）、ソーキ、薬罐（ヤカン）等、ムトの必需品は若ウヤ、特に初出ウヤ達の責務で補っておりましたが、1987（昭和62）年頃からは、ムトの親（ウヤ）達の御芳志とご配慮により備品等もほぼ完備されております。

賄所は1979（昭和54）年以前の建物には特別に賄所はなく、若ウヤ達が鰹船や鰹節工場から天幕（テント）を借り、民家から余分にあって使用していない古い柱や角材等を借り受けて仮の賄所を造り、3日間の行事に備えておりました。

水は水タンクの設置は、理解ある先輩ウヤ達の配慮によって他のムトに先駆けて1961（昭和36）年頃出来たとの事です。それ以前は、若ウヤ達が井戸水を棒で担ぎ容器を満たし、使用水が充分保たれるように幾度も幾度も水汲みを行っていたとの事であります。

燃料の湯沸しは、1973（昭和48）年までは薪で、初出ウヤ達が各自で持ち寄ったり、又は、鰹節工場から分けて貰い充てておりましたが、1974（昭和49）年から1982（昭和57）年まで石油コンロが使用され、更に、1987（昭和58）年からガスを使用するようになり、現在に至っております。

照明は1976（昭和51）年までは、石油ランプを使用しておりましたが、1977（昭和52）年から電灯が灯るようになります。始めの頃は、小型発電機によって点灯していましたが、後に他のムトと共同で電線を購入し、近くの民家から接続して3日間の行事を遂行しておりました。1987（昭和63）年からは、沖縄電力によって配線され本格的に送電がされています。

道路は大主神社へ通じる道路は1970（昭和45）年

頃に整備されましたが、幅員が狭く人が擦れ違う程度で岩盤が突出している箇所もありました。1980年(昭和55)年には機械力によって岩盤も除去され、現在の巾員となりました。その後、1990(平成2)年から平良市当局のご配慮により真謝ムト正門までコンクリート舗装による整備がされております。

門札は1981(昭和56)年に取り付けられました。灰皿は煙草の吸殻入れ(煙草盆)としてシャコ貝の殻、缶詰の空缶、焼物皿、ガラス皿へと変わり、現在は金属製の灰皿が多く使用されるようになりました。火種も昔は火種を使用しておりましたが、昭和25年～昭和26年頃からマッチに変わり、ガソリンライターを経て、1980(昭和55)年頃からガスライターが使用されるようになりました。

ムトの名簿は1981(昭和56)年からムトの会員構成の名簿が年齢、入会年、親子二代、兄弟2人・・・以上を記載し、作成されるようになりました。ハッピの着用が1986(昭和61)年から、他の3ムトより先に着用されました。簡易水道は1999(平成11)年から簡易水道が敷設されました。

(2)史実を究める上桝ムトゥ

2021 年アギマスムトゥ会員名簿（原文のまま）から引用した。

アギマスムトゥ(元)は、上桝の計佐というのが与那国征伐 1520 年の勇士である。与那国は遠く洋上に離れているので、中山政府の威令も充分に行われず、酋長鬼虎は剛勇無双であったので、その武勇を侍んで貢祖を横領し、不逞を謀っていた。中山政府はこの不逞な鬼虎を征伐するのに、中山の軍旅動かすことなく、その平定を宮古の仲宗根豊見親に一任された。しかし、豊見親の独力では遠く距った与那国まで、舟師を動かして鬼虎を征伐することは至難のことであると思った豊見親は、武力を以て征伐するよりも、智力を以て之を征する方法を選んだのである。

こうして豊見親は嫡子金盛以下一族郎党の外に、宮古各地の頭領として勇名を謡われた精兵をすぐって、与那国島に渡り、(池間出身上桝の計佐とじゃーのでん二人の水先案内で)まず砂川村のあふがま外美人美女を上陸させて、鬼虎に告ぐるよう、「宮古は大飢餓のため島民の大半餓死に及ぶので、大王の慈悲にすがって与那国島に安住したいと考えて遥々渡島したものである」と述べ、鬼虎に美酒をすすめて美人の巧言を以て謀戮した。

宮古を出発するときから水先案内･導案内として豊見親から指名されたのは、池間出身の上桝の計佐とじゃーのでん二人であった。彼等は両人とも船持ちの名人として、また島に居る間は勇名な漁頭であった。すなわち宮古の軍勢がたやすく与那国島に上陸し得だのは、彼等の水先案内がすぐれていたからであった。だから両勇士は数度にわたって与那国にわたり、その地理に通じていたことを示すものである。

上桝の計佐は当時 35 歳の働きざかり､漁頭としてきわめて血の気の多い勇者であったから、豊見親の精兵の最右翼に起ち、真先に鬼虎城に攻め入ったと島では、今に歌われているから、彼は知勇兼備の武将であったのである。だから仲宗根豊見親は凱旋後爵位を下賜するよう上申しようとしたが、自ら固辞して譲らなかった。致し方なく豊見親は彼を島主として、島の政治を彼に任したのであるが､1544 年卒したときには、「島で最もすぐれた傑士はミャーカに葬るべし」という遺習によって荘壮大なミャーカを築造して葬ることになった。

上桝豊見親のミャーカは外囲いの石垣は二重になり、外垣は東西六間･南北四間高さ六尺で、奇しくも与那国征伐にいった伊良部島、国仲の

真々良のミャーカと同型であった。

(3) 自慢の著書「日の出が拝める」マイヌヤームトゥ

古い集落のあったウイバルは、おしなべて平坦な地形の島の南側のわりと高い丘陵地にあり、近くに宮古本島北端の狩俣、彼方には大神島、伊良部島が眺望できる。

マイヌヤームトゥは、そのウイバルの奥まった一段と小高い所にあり、1 年に 3 日しか利用しないコンクリート造りのこじんまりした建物がぽつんと建っている。ここから眺める日の出は格別である。マイヌヤームトゥの起源は定かでないが、ミンギャという島の指導者の居住地パナリザーが島の大司(フズカサ)の屋敷ナカマニーに近い場所にあったことからマイヌヤー(近くの家の意)になったといわれている。マイヌヤームトゥの拝所は屋外にあり、ムトゥに出入りする者は、すべてこの拝所のムトゥの神を拝んでから行事に参加するという習わしになっている。

ムトゥの運営を円滑にすすめるためにサントゥイウヤ(会計)補佐を含めて(2 人)、ニガイウヤ(祈願者 1 人)、書記 1 人、監査役 2 人を置いて行事を進める。さらに、親子、兄弟 3 人がムトゥに参加する場合、米寿を迎えたウヤ、ムトゥに著しく貢献したウヤ等々に対する表彰制度やミャークヅツの酒肴の持参などの不文律がある。

ミャークヅツの酒肴の持参は、古くはウヤマス(ウヤが持参する酒)として粟酒(ンツ)をヒトゥバカス(8 合)、マスヌスゥ(酒の肴)として野菜や海草料理を持参したが、現在はウヤマス泡盛(4 合瓶)1 本に金千円を添え、マスヌスゥにはタコ、イカ、魚や肉の煮物や揚げ物が持ち込まれる。島外者等で料理の都合のつかないウヤはマスヌスゥの代わりに金 3 千円を持参することになっている。

マイヌヤームトゥではズンミ(協議)をアラビ(初日)に実施している。ズンミはムトゥが抱える諸問題はもとより、ミャークヅツのあり方についても各自意見を出し合い論議し民主的な方法で運営されているが、どうしても決着が付かない場合は、ここでも最年長ウヤの決断で決着をみる。

ウイイディウヤ(初出親)は数日前からムトゥヌヤーおよび周辺の清掃、加えて当日は夜の明けないうちから諸準備、接待、後片付け等々、サントゥィウヤ、ウイイディウヤ、バカウヤの面々のご苦労は察して余りあるものがある。感想を聞くと「辛い 3 日間であったがミャークヅツを通してマイヌヤームトゥの一員としての自覚と誇りを持てた日々であり、来る年来る年もぜひこのミャークヅツに参加したい」と喜んでいる。

編集委員の平良新弘(昭和 11 年生)は「仲間のトゥユミャとは 1520 年、仲宗根トゥユミャの夫人ウツメガ(大阿母)の命を受けて池間の大主御嶽の最初の神司(カンツカサ)になった女性である。

仲間のトゥユミャは当時の宮古の女人最高位である大阿母に随行し、中山王に拝謁すること度々あったというから容姿、才能、人格ともに人並み外れていたであろうことは容易に想像できる。

その、仲間トゥユミャの屋敷跡が遠見台の南側のすぐ下にある。現在池間の司母(ツカサンマ)たちが「ナカマニー」と呼び、崇拝している聖地である。森田真弘著『仲間屋真小伝』によると、仲間貞夫氏の曾祖父一家は明治 17 年までこの仲間屋敷に住んでいたという。

私は 55 歳となり、ムトゥヌウヤの資格を得ながら、素直にムトゥへ登ることをしなかった。その頃、私の心の中で、マイヌヤームトゥは仲

神秘的な唯一の語り部(フジャラ)

間トゥユミャの子孫であり、頭脳集団であるというイメージがあったので、マイヌヤームトゥの一員となることに迷いがあった。その後、歳と共に郷里の祭りは、島で生まれ育った全ての人が参加するためにあるのだと悟り、平成 16 年ムトゥヌヤー1 年生となった。

晴れてムトゥヌウヤとなった私は、まず、トゥラヌハカドゥ(東北東の角)にあるンツガミ(粟酒壺)と桐の箱に納まったホゥジャラ(大皿)に興味をもった。なぜ、他ムトゥにないホゥジャラがこのマイヌヤームトゥにだけあるか興味は尽きない。

かつて、大正中期まではムトゥの長老がヤラビマス(神酒)を持って来た人を自分の前方に正座させて、彼の持ってきた神酒をムトゥ所有の中皿に移し、本人に持たせて『ホゥジャラよみ』[9]を行ったという記録がある。

この命の誕生を最高の喜びとするムトゥの儀式に使用されたであろう貴重なホゥジャラが、我がマイヌヤームトゥの家宝としてンツガミと一緒に保管され、先人の心を今に伝えている。このことは大変喜ばしい限りでマイヌヤームトゥの誇りにすべきである」と記し貴重な資料といえよう。

(4) 先達の偉業を受け継ぐ独創的な前里ムトゥ

前里ムトゥ名簿(冊子)の創刊は真謝ムトゥ(昭和 56 年)から 3 年遅れて 1984(昭和 59)年である。

名簿によると、会員 148 人(明治生まれ 21 人、大正生まれ 86 人、昭和生まれ 41 人)で現存者(昭和 3 年生)が二人だけで時の流れを如実に物語っている。

勝連雅夫(大正 9 年生)が編集後記で「経費の捻出は広告(39 名)で充当した。住所氏名、生年月日、郵便・電話番号は役員仲間の手間暇かけ献身的な労力と時間を要した。写真提供(22 点)は譜久村健(大正 14 年生)のご尽力で体裁も整い彩って感謝したい。不備な点は多いが真実を記録する姿勢だけは貫いたつもりだ。そして名簿を 148 名の会員に無料で配布できたことを共に喜びたい」と記している。「ゼロから 1 への距離は 1 から 1000 までの距離よりも遠い」を実感している。

関係資料によると、昭和 35 年には、ズンミで湯飲み茶碗の購入と共同炊事場を作るようにした。また、復帰前の昭和 46 年には炊事場の件でバラス及び砂は 2 缶までとする。資金は現在の残金より 40 弗を使用し不足分を元関係者会員より 1 弗宛を集金に充当すると決議している。1961 年にはマイヌヤー、マジャ、アギマスムトゥは家を持っていないが前里元だけコンクリート建てを構えていた。

2003(平成 15)年名簿までは従来通り生年月日を掲載していたが、翌年から外されている。2016(平成 28)年からズンミ(協議)で住所や電話番号を記載しないことを決定した。真謝、上枡ムトゥと変わり 2016(平成 28)年名簿に前年の築 30 周年記念の新聞切り抜きを掲載し好評を博し令和元年から運営委員長のあいさつが載るようになって今に至っている。

かつてムトゥのウサイは集団で獲った小魚をマースゥニー(塩煮)ひと品でヤラウギーヌハー(テリハボク葉)にのせ振る舞ったという。灰皿

はアズクヤ(シャコ貝)で賄い水は甕に溜めて大事に扱ったことを耳にしただけでも当時が甦る。ムトゥにヤラウギーの大木が存在している光景も名残といえよう。

①　ムトウヌヤー(元之屋)新築に壮大な構想

前里ムトゥは、1983(昭和 58)年に画期的で歴史のページを彩る壮大な計画を立てた。それは元(ムトゥ)の集会所・専用施設・会館の建設である。「先祖代々から続いている前里ムトゥを継承、発展させ子孫に継ぐことは我々の義務であり共同の責任である」と推進した。

「現在の建造物は、1957(昭和 32)年に建築され今年で 27 年。専門家から危険建造物と厳しい評価がある。今年(1984 年)で前里ムト所属のウヤは 148 名。来年あたりからはウヤ全員を収容することが出来ない状態にある。現在、22 坪の土地に 20 坪の建物[10]が建っている。隣接する土地を確保しない限り増築も新築の出来ない環境にある。そこで、地主の配慮で 73 坪の土地を借用することが出来た。現在の土地 22 坪とあわせて 95 坪となる」それをミャークヅツ恒例のズンミ(吟味)に提案し全会一致で可決した。

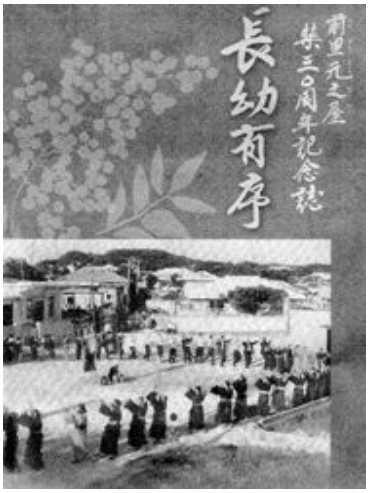
1984 年、浜川清吉(大正 7 年生)委員長以下 15 名の建築委員が選任された。設計は会員で那覇在の一級建築士の伊計良雄、会計を地元の譜久村健を選任した。建築資金については、「前里ムトのウヤと前里ムト関係者で 20 歳以上の所帯を持っている方」は建築資金分担金として、年 1 万 2 千円、期間を 5 年間で 6 万円とすることをズンミ(吟味)で決める。建築委員らは、「大金を義務づけることを過重な負担である。しかし、計画している前里ムト建築工事は恐らく 50 年に 1 回しかない歴史に残る事業である」と趣意書で啓蒙を図った。その努力が実り 1985(昭和 60)年 9 月 22 日に完成した。

②　前里元之屋築 30 周年記念誌発刊

四面海に囲まれた島で、波の音、海の香りで育んだ島人は、天性が明るく人なつっこく独特な話声は大海の響きのように他の地域と異なった感じがする。少年時代を過ごした歳月に心底なつかしく感傷的になることもある。

前里元長寿会運営委員会は、マイザトゥ　ムトゥ　ヌ　ヤー(前里元之家)・築 30 周年を喜び記念誌発刊に向けて腰を上げた。

今は亡き多くの前里ムトゥ(元)のスゥジャッスゥウヤ(長老親)は、先祖代々から続いている前里ムトゥを継承、発展させ子孫に継ぐことは我々の義務であり共同の責任であると 1985(昭和 60)年 9 月 22 日に敷地面積 95 坪コンクリート造平屋 50 坪を完成した。



心一つで出版した記念誌
(撮影；筆者)

記念誌編集で論議に時間かかったのがムトゥの表記である。当て字にムト、元、本とあるが統一してない。読み書きできない時代はムトで通し新築名簿もムトである。古来からムトだから変えてならないと大方の意見だった。結果的には文献もすべて「ムトゥ」だから発音通りの表記とし表紙を「前里元之屋」まで決定した。

奇しくも、戦後 70 年、ヒャーリクズ(海神祭)120 周年、宮古島市合併 10 周年、伊良部大橋開通記念に前里元之屋築 30 周年記念誌『長幼有序』(A4 判 2015 頁 162)を出版した。ミャークヅツ当日、集った会員から「ジャウムヌマイダ」(よかった)「ッファンマガンカイ」(子や孫へ)「クゥマヌムトゥヤイバナリーウイ」(こ

のムトゥだからできる)等の声が方々から飛び込んできた。

池間島には『池間小学校 60 周年記念誌』1963『池間小学校 90 周年記念誌』1994『池間中学校 50 周年記念誌』2000『池間小学校 100 周年記念誌』2004『在平良池間郷友会記念誌』1990『在沖池間郷友会誌』1980『池間大橋開通 15 周年記念誌』2008『池間島ハーリー100 周年記念誌』1995『池間大橋開通 15 周年記念誌』2013『池間島刊行ガイドブック』等と数多くの記念誌出版が後を絶たない。そのほか池間文化協会が『ふるさと池間の暦』1998『設立記念誌いびら』1997『ふるさと自慢あの人この人』1999『設立 20 周年記念誌ドキュメント』2017『スマビトゥ列伝』を定期的に上梓している。

大学の研究者の来島もあって横浜国立大学文化人類学の学生が数日滞在しゼミナールとして『沖縄・池間島』2001『沖縄・池間島ミャークヅツ』2003』沖縄・池間島ぬくもり』2004 を学生の手による新鮮なレポートが目を引く。

個人的には『つむかぎ伯父史米寿』1988『仲原壮一郎と池間島』1989　『伯母史のしずく』1991『池間 大橋開通記念』1992『米寿記念誌おかあ』1997 『しげぶば米寿記念誌』1999『真実一路古稀記念誌』1992『私の海上生活 40 年米寿記念』2014『池間小学校ニッパチ同期会記念誌』2012 も隠れた島人ひとりの自分史であり足跡である。この記録誌を保存継承し後世へ繋ぐ責務もあろう。

③名簿のあいさつ(抜粋)から温故知新の共有化

ミャークヅツには会員へ冊子名簿が配布される。前里ムトゥでは運営委員長のあいさつを掲載している。

「ウヤタッサリ。令和時代の幕が上った。今年も 230 年の歴史と伝統を誇るミャークヅツを共に迎え喜び祝うことが出来たことを嬉しく思う。ここ前里ムトではウイディウヤ(初親・新会員・昭和 40 年生ンドゥイ)9 人が入会した。

ムトヌカンガナスを崇め大将ウヤの居座る広々とした室内にひときわ「長幼有序」の扁額が鮮やかに光り輝いている。ここで 3 日間、アグ仲間やバカウヤ、ナカウヤ・ウイビトゥウヤがウサイとミルク酒を交わしブドゥイマーイ、カラオケ、ゆがたい、ズンミ等で交流を深める舞台である。この座は 1985(昭和 60)年に新築しミャークヅツを確かな目で見守ってきた。それは台所、カウンター、収納戸棚、壁面の寄付者一覧や写真、賞状等が静かに物語っている。(中略)(令和元年歓迎のあいさつ)

「待ちに待ちたるミャークヅツ。ナミジュルイ　カギジュルイヤ　ヒィ今年のミヤークヅツを共に迎え喜びお祝いできますことを嬉しく思います。(略)

ムトゥでは不文律・暗黙の掟があります。ひとつにムトウン　ヌーリーヤ　ヤディウンヤフン(ケンカや口論をしない)。二つ目が、ナラカラ　サキイ　ウサイ　ユ　サダリー　ファーン(自分から先に飲み物や食べ物を取らない)。三つ目にスカスマーイヤフン(金品、物品の不正をしない)ことです。初出親は「長幼有序」と「暗黙・不文律の掟」を心して 3 日間のカギウダイ(勤め)をアグタトゥ　ツムッシャッチャヒーカナーマテイヨ。(マイクを親に向ける)―中略―　(参考：前里ムト名簿 2019)

「新型コロナ感染防止でアリャーミィーン世の中だ。125 年節目の記念ハーリーが中止。人口 539 名 70 歳以上 213 名が最も喜ぶ敬老会も中止。そして 230 年の伝統と歴史を誇るミャークヅツまで規模縮小開催と人ごとでない。前里ムトゥでは築 35 周年記念を祝い相応の計画まで進めていただけに至極残念である。―中略―足跡を知ることによって先達の涙ぐましい画期的な取り組みから 35 年を迎えた。よく言われ

る「時代が人物を生み人物が歴史を作る」そのものである。(略)今年のミャークヅツはコロナで運営が大きく変わった。運営委員を中心に 3 日間、服装も背広正装を脱いでかりゆしウエアで出席する。マスヌスゥー、ウサイ(肴)はないがムト予算で進める。築 35 周年を歓び幟(のぼり)10 本で表現している。ウヤタッサリ。「ガンジュヤーヒィー　ウラマイウトゥイ ヤーニヌクヌウラン カギジュルイ ナミジュルイ カナイ ダンガー　カナーディ　ウヤタッサリ」。ツムーッシチャヒィ楽しみにしている」。(前里ムト歓迎あいさつ 2020)

「今年のミャークヅツも昨年につづき中止・規模縮小の開催となった。島の暮らしが昔話になった古き良き昭和 30 年代をたずねてみる。「理髪店 4 件、雑貨店 9 軒、旅館 2 件、豆腐屋 3 件、アイスケーキ 3 件、ダンスホール、そば屋、映画館(2 館)もあった。島の青年は出漁できないとき必ず学校に集まった。米国民政府の援助により安い費用でパンは平良から池間丸で運び港から、女子中学生が交代で頭上運搬によって学校まで運んだ。部落民と教師、生徒と教師間は緊密化で小中職員の 20 名中 11 名が同姓で「〇〇男先生」「〇〇子先生」と呼び教員も生徒を姓で呼ばず名前で呼んだ。親しい者の家の前を通るときには必ず声をかけ自分の存在を知らせる。呼ばれた方は、表に出なくても良かった。」（前里ムト名簿 2021）

(5)課題が見え隠れする巷間の声

真謝ムトゥ名簿によると 1995 年、年齢引き上げについて協議された経緯がある。55 歳のウィイディウヤ(初出親)が制定されてから半世紀も

表2　会員の参加者・親子組等の状況

	会員数	本人参加	会費参加	参加者合計	マスムイ	初出親
2014（平成26年）	360名	148名(41%)	76名(21%)	224名(62%)	11名	13名
2015（平成27年）	363名	164名(46%)	58名(16%)	154名(42%)	11名	11名
2016（平成28年）	370名	143名(39%)	58名(15%)	201名(54%)	11名	11名
2017（平成29年）	364名	154名(42%)	58名(15%)	221名(60%)	11名	11名
2018（平成30年）	372名	143名(38%)	28名(8%)	171名(46%)	14名	12名
2019（令和元年）	374名	141名(38%)	47名(13%)	188名(50%)	14名	12名
2020（令和2年）	371名					4名
2021（令和3年）	367名				4名	6名

＊2020、2021年はコロナ感染予防で規模縮小のため不可

表3

	2012 平成24年	2013 平成25年	2014 平成26年	2015 平成27年	2016 平成28年	2017 平成29年	2018 平成30年	2019 令和元年	2020 令和2年	2021 令和3年
親子組	22組	32組	30組	29組	28組	24組	25組	24組	17組	16組
兄弟6人							1組	1組	1組	1組
兄弟5人	2組	2組	3組	3組	5組	5組	3組	3組	3組	3組
兄弟4人	8組	8組	9組	10組	9組	9組	9組	10組	10組	8組
兄弟3人	21組	21組	19組	19組	17組	19組	20組	24組	24組	36組
兄弟2人	32組	69組	61組	59組	59組	56組	53組	43組	42組	44組

参考：2021年前里ムト名簿

経った。昭和から平成の移行と共に時代の急激な変化は否定できない。団塊世代も 70 歳を越えて超高齢化 2025 年問題も出てきた。55 歳は働き盛りで職場においては、リーダーや管理職で席を温める時間のない多忙な日々であることは間違いない。簡単に年休行使も気の引ける年代である。加えて島外に暮らす者にとって負担も大きく深刻である。

家庭において経済的に相応の厳しさも伴っているだろう。この時期に 4 ムトゥのズンミ(吟味)を開いて定年退職時の還暦 60 歳にする時期かも知れない。出来たら、30 年前の 1958(昭和 33)年の 50 歳入会予定者と同じように当事者からの意向を聞きたい。ムトゥ年齢改正の理由は幅広く必要性に迫られて実施してきたと思われる。健康、豊穣祈願、慰労、神事とはいえ勇気をもって真摯に協議する必要がある。2022 年の初出親は 1968(昭和 43)年生である。

前里ムトゥの 3 日間は時代の急激な変化で簡素化の傾向にある。戦前までサントゥィ・ウヤ(会計親)がマーニの葉を用いてバラザン(藁算)までしていた。それに煙草火種の保存や夜光貝の殻を灰皿にユウナの葉、ヤラブ木の葉にウサイ(肴)を用意したという。かたくなに継がれてきた秩序を守るためには相応の収拾に必至であったろう。一糸乱れぬ言動が伝わってくる。

当時、旧前里元之屋ではスゥジャスゥウヤ(先輩親)が東口の入り口から南口がバカウヤ(若親)と決まり反すると叱咤された。年齢階梯だが敬愛する精神に年々、欠け無礼講に走る嫌いがある。時間のルーズさと身なりの不統一それから会場の整然とした行動も薄れてきた。ブドゥイマーイも想定外の踊りを披露するので気をもむ。余興にしても常識の域を超えて自由気ままに走る。

プログラムに民話や短いゆがたいタイム(世語り、夜語り)そして語り伝えといった工夫も問われている。水浜クイチャー参加も激減し自分中心の言動が目立つようになってきている。継承発展には「計画は早めに行動を着実に評価も厳しく」を心してやらねばならない。

4 ムトゥ統廃合も新たな火種になりつつある。真謝、上枡、前之屋ムトゥは海岸沿いに立地し塩害が激しく台風の際、まともに風雨と共に飛沫を浴びる。そのため施設の劣化が急速に進み老朽化で建築物の取り壊しが早まる気配だから一考すべき問題である。そのうえ、ウイイディウヤ(初出親)の減少が極端に目立ってきた。中学校同期は 2 クラスが 1964 年生まで長年続いていたが 1965 年生から 1 クラスとなった。現在 2021 年は 12 名の複式学級で人口の増加も期待できない状況にあり 2022 年のウイイディウヤが 1967 年生である。

自治会が音頭とって 4 ムトゥ合同の組織は出来ないか。2020 年、予期しない想定外のコロナ禍で各ムトゥとも戸惑った。結果的には生命の安全第一でクイチャー中止、各ムトゥ規模縮小に決まった。しかし、当日はツカサンマ(司母)クイチャー対応の決定事項が浸透せずトラブルまで発生する始末だった。緊急的な状況にいち早く協議の場を開催しなければならないだけに急務である。各ムトゥ特有の運営方法があり統一の難しさがあるものの大同小異、最大公約数といった民主的に展開すると実現できるだろう。

また、各ムトゥとも毎年名簿を発刊している。ミャークヅツ継承発展からも切磋琢磨して共有化をめざして交換していけたら新鮮な取り組みも期待できる。古くからのムトゥ不文律を活かしつつ気宇壮大な発想で挑むことも問われている。それから新型コロナウイルスによる 2 カ年(2020～2021)の空白はムトゥにおける 3 日間の神事をはじめ運営(初出親賄い)、接待、プログラム等に微妙な変化を憂う。

5　ミャークヅツを支えた池間島の軌跡

1637年	宮古、八重山に人頭税を制定。
1644年	遠見台を設置。
1720年	佐良浜へ14戸を強制移住。佐良浜は2020創建300年記念年祝賀会開催。
1720～1723年	伊良部島の北部に自由耕作者(出作耕作者)続出。
1766年	前里村を創建。前里ムトゥは2016年に創建250年記念誌「ずなら」発刊。
1771年	明和大津波(宮古死者2548人、八重山死者9313人)。八重山白保沖が震源地。
1778年	仲保屋の池間与人玄孝(忠導氏玄孝)着任。
1786年	ミャークヅツが始まったといわれる。
1852(嘉永 5)年	子年の大飢饉。
1874(明治 7)年	平良北横武の地に西原村創建(池間島73戸、佐良浜15戸、横竹2戸)。
1884(明治17)年	糸満漁夫、水中眼鏡導入。
1890(明治23)年	親泊金蔵が帆船宝来丸で狩俣―池間間定期航路。
1894(明治27)年	ヤーマタビ(八重山出漁)開始。
1895(明治28)年	西辺小学校・池間分教場設置。ハーリー開始。
1903(明治36)年	人頭税廃止。徴兵令施行。池間小学校創立。
1906(明治39)年	鮫島幸兵衛がカツオ操業開始。
1909(明治42)年	カツオ生産組合を組織し漁船を６艘購入。かつお節加工場も操業開始。
1910(明治43)年	池間漁業協同組合が県から認可。八重干瀬の専用漁業権を取得。
1911(明治44)年	カツオ船が動力化。
1915(大正 4)年	池間―平良間で動力船大正丸が就航。
1916(大正 5)年	カツオ創業10周年。宮古の三大特産品(上布、黒砂糖、鰹節)。
1918(大正 7)年	ウハルズ大主神社の鳥居建立。
1919(大正 8)年	コレラ大流行し池間島は交通を断ち食糧を沖縄本島より調達(罹患者ゼロ)。
1920(大正 9)年	サトウキビ製糖工場開始。「カツオの島いけま」風評。
1921(大正10)年	池間尋常小学校が高等小学校併置。池間狩俣間で帆船転覆19人死亡。
1924(大正13)年	カツオ船に散水器を設置。垣花漁夫により深海一本釣り開始。
1925(大正14)年	イーヌブーの干拓事業に着手し昭和9年完工。4氏が沖縄水産学校卒業。
1926(大正15)年	カツオ創業20周年。80歳以上の敬老会を実施し対象者8名。
1927(昭和 2)年	池間丸12㌧が平良―池間1日1往復。
1928(昭和 3)年	奉安殿工事に児童教師が建築資材の細石運搬。
1929(昭和 4)年	南洋漁業のため北ボルネオへ渡航。
1932(昭和 7)年	仲間越漁港の構築。第２重宝丸遭難15人が消息不明。
1934(昭和 9)年	仲間越の船溜場改修工事完成。
1935(昭和10)年	ヤビジ専用漁業権で佐良浜漁民が池間丸襲撃事件で騒動。ヤビジ潮干狩り開始。
1937(昭和12)年	池間郵便取扱所開設。新造船池間丸19㌧就航。
1938(昭和13)年	池間小学校ユニムイに移転。軍人墓地建立。
1940(昭和15)年	池間島灯台完成。
1943(昭和18)年	司親制度を廃止し、神主制度を置く。
1944(昭和19)年	台湾疎開1回目360人(児童117人)。2回目児童100人。
1946(昭和21)年	カツオ創業40周年。温習所設置。疎開先から続々引き揚げ。
1948(昭和23)年	池間初等学校が池間小学校に改称。平良南中学校池間分校設置。
1949(昭和24)年	神主制度を廃止し、司母制度を復活。平良南中学校池間分校は池間中学校独立。
1950(昭和25)年	台風エルシー来襲、大本丸遭難瑞光丸が乗組員全員救助。池間丸は下崎海岸で無事。
1951(昭和26)年	池前水産組合が池間漁業協同組合。
1955(昭和30)年	池間親子ラジオ社設立。

1956(昭和31)年	カツオ創業50周年。大衆浴場（島の湯）設置。
1957(昭和32)年	フデ岩灯台点灯。池間島に新造船池間丸29ﾄﾝ黄金丸3ﾄﾝ就航。映画館経営。
1958(昭和33)年	池間協同カツオ加工場完成。
1959(昭和34)年	第１宮古島台風(サラ)。カツオ漁で異常大漁。
1960(昭和35)年	空前サンゴブーム。ボルネオ南方カツオ漁業開始。パン給食開始。
1961(昭和36)年	森田真弘「仲間屋真小伝」刊。
1962(昭和37)年	池間島に電話開通。
1964(昭和39)年	池間漁港整備開始。
1966(昭和41)年	第２宮古島台風(コラ)、最大風速65m/s(最大瞬間風速85.3m/s)。
1967(昭和42)年	新造船池間丸(38ﾄﾝ)就航。OHK宮古放送局開局。
1968(昭和43)年	池間中学校卒業生が本土就職。第３宮古島台風（デラ）。
1971(昭和46)年	異常干魃(185日)。
1972(昭和47)年	本土復帰。野口武徳「沖縄池間島民俗誌」刊。池間－狩俣間海底送水完成。
1973(昭和48)年	池間島水道工事竣工祝賀会。
1974(昭和49)年	南方(ソロモン、ラバウル他)に船団で出漁。宮古～那覇間の電話自動化。
1975(昭和50)年	伊良波富蔵がヤビジ地形、地名原図作成発表。
1979(昭和54)年	伊良波盛男が第2回山之口貘賞受賞。
1980(昭和55)年	池間―平良間にフエリー就航。
1981(昭和56)年	真謝ムトゥが名簿の創刊。前里ムトゥが1984(昭和59)年に冊子で創刊。 前泊徳正「池間島のミャークヅツ」刊。
1982(昭和57)年	前泊徳正が「池間島の民謡」刊。大主神社改装。
1983(昭和58)年	池間漁港みなとびらき。大井浩太郎が「池間嶋史誌」刊。
1985(昭和60)年	前里元之屋・新築祝賀会。市原千佳子が第8回山之口貘賞受賞。
1986(昭和61)年	真謝ムト法被着用。第１回「池間民族の集い」。
1988(昭和63)年	マイヌヤー家屋完成。
1989(平成元)年	1935(昭和10)年生・初出親。
1990(平成 2)年	前里元之屋・築5周年　　セーイカ漁を操業。池間中学校に俳句記念碑除幕。
1992(平成 4)年	池間大橋開通。「池間丸・黄金丸」お別れ感謝会。池間島に初の信号機設置。
1993(平成 5)年	池間小学校創立90周年記念式典・祝賀会。前泊徳正が「第2重宝丸遭難記」刊。
1994(平成 6)年	1940(昭和15)年生・初出親。
1995(平成 7)年	前里元之屋・築10周年。100周年記念ハーリー。ミャークヅツの祭場跡発見。
1996(平成 8)年	マイヌヤームトゥが法被着用。カツオ公園に「池間行進曲」歌碑建立除幕式。
1997(平成 9)年	前里ムトゥで法被着用を開始。
1998(平成10)年	マイヌヤームトゥが幟(のぼり)を制作。池間公民館落成、祝賀会。
1999(平成11)年	池間初の真謝ムトゥの吉浜6兄弟(朝光、朝善、朝成、朝勇、朝栄、朝元)誕生。 池間中学校創立50周年記念式典・祝賀会。八重干瀬の呼称をヤビジに統一。
2000(平成12)年	前里元之屋・築15周年。「県営池間公園」計画断念。
2003(平成15)年	台風宮古島に直撃し電柱900本倒壊。「自然学校」計画に反対集会。
2004(平成16)年	1950(昭和25)年生・初出親。池間小学校100周年記念式典・祝賀会。
2005(平成17)年	マイヌヤームトゥがノー背広・ネクタイ開始。前里元之屋　・築20周年。 伊良波盛男「池間民族屋号集」刊。
2006(平成18)年	カツオ漁創業(1906年)100周年。カツオ節製造工場完全廃業。
2007(平成19)年	在沖の森田恒勝提唱「第1回ミヤークヅツ講話」事務局・講師：伊良波盛男。 前之屋ムトゥが「日の出が拝めるマイヌヤームトゥ」冊子刊行。
2008(平成20)年	上枡ムトゥから石原兄弟6名（信一、正美、直記、豊、敏美、智男）誕生。 前里ムトゥが「かりゆしウエアー」着用を決定。
2009(平成21)年	1955(昭和30)年生・初出親。池間共同カツオ加工所撤去解体/52年の歴史に幕。
2010(平成22)年	前里元之屋　・築25周年。池間漁協に製氷冷蔵施設完成。

2012(平成24)年	池間大橋開通20周年記念に自治会が「やびとぅんーながかぎ大橋」刊行。
2014(平成26)年	1960(昭和35)年生・初出親。「池間の海の生きものカレンダー」刊。
2015(平成27)年	前里元之屋・築30周年祝賀会及び記念誌「長幼有序」刊。
2016(平成28)年	前里ムトゥは「会員名簿」住所削除。前里村創建250年記念誌「ずなら」刊。
2018(平成30)年	前里ムトゥで初の6人兄弟(勝連浩佳、見治、久吉、覚、宗明、秀吉)表彰。 真謝ムトゥ2代目兄弟6人誕生(佐久本昌治、春治、広光、達夫、美次、八四三)。
2019(平成31)年	1965(昭和40)年生ウイイディウヤ(初出親)。
2020(令和 2)年	コロナ感染防止対策で規模縮小。前里元之屋築35周年。
2021(令和 3)年	コロナ感染防止対策で規模縮小

参考：2021(令和3)年真謝、上枡、前里ムトゥ名簿。前里村創建250周年記念誌ずなら2016。

おわりに

戦後、ミャークヅツはハーリーと共に着物や履物を新調する日でもあった。一週間前から平良の町で衣料品を営む商人達が、出張販売で島にやってくる。区長が前日までにムトゥの行事と共に、ウハルズ御嶽の鳥居の双方に「豊年祭」の幟をたてる。水浜広場には無数の提灯が下がり中央に酒(一斗入り)を置き豊年の旗をたて一気に祭りムードが高まる。

3 日間全体会場の水浜において午後 4 時頃から、司母達が着物で正装し輪になり「クイチャーアーグ」を歌い舞踊をはじめる。真謝元を先頭に上枡、前の家、前里の順で 4 ムトゥ(元)の親達も輪の中に入り踊る。続いて一般参加で輪がだんだん広がっていく。1930 年から 1940 年頃まで区長が率先して踊った。

なぜ、ミャークヅツが島をあげて盛大に催されるか。何のための行事か。長年の伝統とはいえ島外からも老若男女が参加し祭り一色となる。主役となるムトゥの親達は酒を交わし友好を深め賑わう。ウハルズの神様を仰ぎ崇める神事の言い伝えを信じて参加している。誰しも深く考えないところに継承発展してきている。その中に、起源はもとより元、ムトゥ、ムト、本、モト表記が統一できない現状があった。

毎年のミャークヅツ日取りは干支でいう甲午(きのえうま)で旧暦 8 月以降のその日から 3 日間が行事の期間であるが 2015 年に問題が発生した。ミヤークヅツは十五夜(新暦 9 月 27 日)

前里元長寿会の運営、編集委員(撮影：砂辺浩和)

を終えないと実施できないといわれがあるからだ。自治会長は歴代のツカサンマ(司母)や関係者から情報を収集しずらすと 11 月 14 日(旧暦 10 月 3 日)となる。池間島では月の呼称で旧暦 10 月はカンヌ・ニャーン・ツツ(神無月)として神様が存在しない月だけに避けねばならない状況にあるという。自治会は最終的にヒューイ・トゥィ・ウヤ(村行事の日取りを決定する親)によって決まった。

1997 年には、十五夜と同日の時があった。池間島は翌月に実施したが分村した佐良浜がその日に行った経緯もある。池間において干支の甲午はツーヌンマヌヒーと言っている。ツーは母乳のことでありンマが母親とあって飲み尽くせないほどの乳を蓄えている意味を持っている。

55 歳以上の男性だけが執り行っていて農耕や漁労に関する儀礼の色彩は全く見られない。ましてや農作物や漁獲物を奉納する場面もな

い。そこには、ミルク湯、水、酒そしてウヤマス・ウサイ(酒の肴)を飲食しつつ同年生が中心に親睦や慰安に世間話で終始している。確かに、スゥジャッスゥウヤ(最長老格)の挨拶、初出親の自己紹介、歓迎挨拶、表彰、会計報告、ズンミ(協議会)等もある。ブドゥイマーイ(高齢者順に踊る)がありカラオケも賑やかであり時を忘れるほどだ。

前里ムトゥには以前ニガイ・ウヤ(願親・司親)が外来のお客からお祝儀や酒の贈答品に対して、全員へ「〇〇〇が、酒を届けてあるのでスキー・フィー・サマティ(祈願)」といって報告する。その昔、マスムイ酒を出すときは、「誰某の〇男、〇女のマスムイ酒」といって出す。これをバカウヤが受けスゥジャッスゥ・ウヤ(首座の親)の所に持って行って「〇〇のマスムイ酒として誰々が持ってきたのでウミウキ・フィーサマティ(お見受け下さい)といって差し出すとスジャッスゥウヤはムトゥ・ヌ・カンに報告して供えていたが会員の増加によってニガイウヤを外したという。

前里ムトゥでは神様に係る遺物も静かに眠っている。それは方位石や水浜ジャー(広場)で前里元の構える一角に神が鎮座する石も存在している。この史実には記録もなく先輩達も語らないまま時だけが流れている。前里元の東に座る方位角については、神様を四方八方から集めることを意味しているという。水浜ジャー(座)の地面からのぞく神石については、ムトゥの神様を一緒にクイチャーを見物し踊ろうと御神酒をお供し案内することも口伝だけである。

それから筆者が入会 2 年目 2002 年に親戚の T・Y ウヤが、ムトゥヌカンに供える両脇の神花木の植わっている場所を案内された。当時は、その草木を供えていたと神妙に語っていたが確かなことを把握してない。あれから 20 年経った今は、サントゥイウヤ(会計ウヤ)によってイヌマキ枝葉を供えている状況にある。ミャークヅツにまつわる伝統継承や口伝を深く探求し記録の必要性を痛感する。

注

(1)ミャークヅツ研究の先駆者で第一人者でる。野口武徳は 1961 年に池間島を訪れた。前泊は区長(満 52 歳)妻のハル(助産婦)の家族と 6 カ月間暮らした。野口との邂逅を経てから意識して記録を取り郷土研究家として学界でも広く知られるようになる。先達からの聞き取りと記憶力の豊かさで来島する研究者や学者、学生に対して資料を提示し丁寧に説明した。

(2)勝連メガ(明治 31 年生)は「水がなくてね。子供の頃から朝から夜まで水汲みばかりしていたアサイツガーと言って朝 3 時から起きて井戸へ裸足だった。8 か所の井戸は生活用水や飲料水に分けて水汲みした」話者だけでなく島の歌い手としてミャークヅツジャーでも肉声で貢献した。

(3)貢租免除の片輪者のことで非人間的な取扱いを受ける。故意に手足を落とし疋人を願い出た者もいた。今でも労力、能力が弱い行為の際に冗談めかして「ヒツニンガマ」と発する。

(4)前泊徳正は 1984 年ころ、筆者を神聖のウハルズ南東のにトゥマイ(泊浜)へ案内した。人頭税時代に役人の舟が接岸するフーズバマ(役人浜)だった。向かいがツクシャウバマ(庶民浜)といって通路までフーズンツ(役人道)ツクシャウンツ(庶民道)と教わった。自然浜とはいえ一見して上下関係つくりが明確で今でもそのまま存在している。

(5)本名とは別に他人がつけたアダナ(渾名・ニックネーム)である。それに出会うと祖先の暮らしぶりやふるさと文化に触れる手がかりになり興味深い。筆者は、奥浜(アダナ)の由来を 2005 年に前里ムトゥで講話をしたがウヤの誰もが初耳だと言っていた。

(6)ミャークヅツの各ムトゥでは前年の予算・決算、承認報告と会運営にかかる協議のことをズンミ(吟味)という。伝承によると、ウハルズ(御嶽)の東に集落発祥地と言われるウイバル(上原)があり、その一角にシャコガイを 12 個も円形に並べた神聖の場所がる。そこで、4 ムトゥの代表でズンミがもたれた伝承がある。

(7)前泊ノートには「ッザカター　イスグル　ンマカター　イーグル」(父方は石で追い払い母方はおにぎりで迎える)等を 61 も数える諺をまとめている。宮古の諺に関する著書は「浦崎：宮古の俚諺格言 1972」「吉村：宮古のことわざ集 1974」「佐渡山政子：んきゃーんじゅく 1994」「佐渡山：沖縄・宮古ことわざ 1998」がる。

(8)ふるさとは言葉である。方言は共通語で明確に表現できないニュアンスや味をもつ語りの驚き、術力、知る喜びがあり民族の生きた文化である。古くから生活の中に生きてきた言葉には独特の美しさがある。ムトゥはミャークヅツの 3 日間、スマウツ(島口)一色である。

(9)伝統誇るフジャラ(大皿)がマイヌヤーにある。マイヌヤーでは 20 年ほど前までスゥジャッスゥヤ(最高齢者)宅で大事に保管しミャークヅツに持ち出すだけだった。真紅で漆で塗られた 6 個(写真)の上品なものである。ンツイリマカイ(粟やツンを発酵させた酒)であった。今のように酒を入れるものでない。御神酒としてヤラビマスの際にスゥジャッスゥウヤが使っていた。「ンーンツ、アーンツ」を入れるものだった(吉浜カナス 1898 年生談　当時 80 歳)。

(10)当時(1957～1984)コンクリートの建物は少なかった。22 坪の土地に 20 坪の建物だが級友の N 君と U 君の 2 世帯が間借りして暮らしていた。ミャークヅツになると必然的に引っ越した。

参考文献

森田真弘　「仲間屋真小伝」1961
野口武徳　「沖縄池間島民俗誌」1972
大井浩太郎　「池間嶋史誌」1984
笠原政治　「池間民族考」2008
前泊徳正　「池間島のミャークヅツ」1981、「池間島の民謡」1982、「前泊徳正ノート」1975
前泊廣美　「初出親のために　ミャークヅツ」1996
平良新弘「海人の島」2002
伊良波盛男　詩集「幻の巫島」1979、長編物語詩「カナシ伝」1980、「池間民俗語彙の世界」2004、「池間民族屋号集」2005、「池間島の地名」2010、「わが池間島」2011
上里武　本村満「写真で追う池間島のミャークヅツ」2008
伊良波ひろし　「池間島からの視点」～ミャークヅツ・カツオ漁業を中心に～2013
川上哲也　「おかあ」1997、「カツオ万歳」2007、かわかみ通信「つむちゃい」1995
前里元長寿会　元之屋築 30 周年記念誌「長幼有序」2015、前里村創建 250 年記念誌「ずなら」2016
池間小学校 60 周年記念誌 1963、池間小学校 90 周年記念誌 1994、池間中学校 50 周年記念誌 2000、池間小学校 100 周年記念誌 2004
池間文化協会　「ふるさと池間の暦」1998
慶世村恒任　「宮古史伝」復刻 1976
平良市教育委員会　「平良市史」第 7 巻　民俗 1987、「平良市史」第 8 巻　資料編 6(考古、人物、補遺) 1988
宮古島市教育委員会　「宮古島市の文化財」2011、「みやこの歴史」第 1 巻　通史編 2012
仲間井佐六　「みやこ風土記」1977
伊良部村役場　「伊良部村史」1978
仲宗根將二　「宮古風土記」1988、「沖縄県・宮古史料の旅」1995
佐渡山正吉　「沖縄宮古のことわざ」1998
稲村賢敷　「宮古島庶民史」1957
琉球大学民俗研究クラブ「沖縄民俗」第 19 号 1972
下嶋哲郎　「沖縄・聞き書きの旅」1983